

研究報告

神の「幸（さちはひ）」—『靈能真柱』をもとに—

田 畑 真 美

富山大学人文科学研究第78号抜刷

2023年3月

研究報告

神の「幸（さちはひ）」―『靈能真柱』をもとに―

田 畑 真 美

一、問題の所在

『靈能真柱』は平田篤胤が古学を学ぶ徒に示した、その学びの心構えを固める書¹⁾である。それは本居宣長の門人服部中庸の手になる『三大考』を踏まえつつも、世界や人間をめぐる独自の観点を提示するものであった。篤胤はこの書の目的及び方法を以下のように述べる。

斯てその大倭心を太く高く固めまく欲するには、その靈の行方の安定を知ることなも先なりける。(中略) さてその靈の行方の安定を知らむするには、まづ天地泉の三つの成初またその有象を委細に考察て、またその天地泉を天地泉たらしめ幸賜ふ神の功德を熟知り、また我が皇大御国は万の国の本つ柱たる御国にして、万の物万の事の万の国に卓越たる元因、また掛まくも畏き我天皇命は万の国の大君に坐すことの真の理を熟に知得て後に魂の行方は知るべきものになむ有りける。(『靈能真柱』上p.93)

ここで篤胤は、人間の靈の行方を知ることが漢意によって揺るがされることのない堅固な心を形成すると言う。「靈の行方」とは死後の行方のみならず、そもそもそれがどのように生みだされたかということも含む、すなわち人は何処から来て何処へゆくのかということの意味すると考えられる²⁾。いわばそれは、人間の存在根拠を知ることであった。そのために篤胤は、壮大な世界の成り立ちから語ることを試みたのである。そしてそれは、壮大な枠組みを捉えることのみならず、学徒が個々にその存在の意味を問う作業を行うことをも要請していた。つまり壮大な枠組みが今ここにある自己の存在を説明するものにほかならないことを実感をもって理解することが、個々の「大倭心」の根を堅固にすることなのである。

そのために知るべきことを、篤胤はいくつか挙げている。それは天地泉の世界の成り立ちとそのありさま、その背後で働く神々の力、我が国が万国に優越する根拠、並びに万国を統べる大君としての天皇の位置づけである。後者二つを支える価値観は、世界の成り立ちと不可分である。もっと言えばそのように世界を成り立たせたものが神々の力であるため、以上の四点は世界を支える神々の力を知ることと集約できよう。そしてその知は、そうした神々への尊崇とも不可分に結びつく。

上記の観点から、本稿では特に神々の力がどのように描写されているかに焦点をあてて考えていく。その際問題となるのは、神々の位置づけである。神々とはどのような存在なのか。そ

して何をなすのか。篤胤は『三大考』にならい、天地泉の成り立ちを十段階に分け、その図に神々の名も記している。神々には位相の相違や各々の役割が考えられるが、それは整然と秩序づけられた世界のありようと呼応している。世界の成り立ちとその根底に関わる産霊神二神をはじめとし、その産霊の働きを命令として受け継いで事をなしていく伊邪那岐命と伊邪那美命、及び彼らの生みだしていく神々が要所要所でその力を発揮していく。その力の性質を一言で表せば、「幸（さちはひ、さきはひ）」³⁾であると言える。それは様々な物事のありようを祝福し、恵むことである。

翻れば篤胤の狙いは、学徒がこの世界、この私という存在が様々な神々の「幸」によって成り立つことを知ることにあった。言うまでもなくそれは「大倭心」を固めることにほかならないが、同時に「大倭心」の質を問うことにもつながる。「大倭心」を支えるものはそうした神々への尊崇であり、その神々の手による世界や私という存在のありようの不可思議さ、畏さをそれとして受け容れることである。それは宗教心もしくは信仰心⁴⁾といったものであると言えよう。そうした宗教心ないしは信仰心の対象となる神々とはどのような存在なのか。その位相や役割に着目しながら、神々の与える「幸」についてその概観を明らかにしたい。本稿では特に、産霊神二神と伊邪那岐命・伊邪那美命の営為、及び両者の関係に焦点を当てる。

さらにその「幸」を知ることは、単に宗教的な意味を帯びるのみではない。人間存在が自らの生の根底に神々の営為が存することをすることは同時に、この世での人間の倫理的営為を支えることにもなる。このことは篤胤の世界観の根幹にも深く関わっている。つまりいわゆる顕明事と幽事の問題に繋がるが、この点について篤胤は、『古史伝』二十三⁵⁾で詳しく論じている。本稿では『古史伝』の言説について言及する余裕はないが、宗教的側面、倫理的側面双方において人間存在を支えるものとしての神という観点は篤胤の思想の核となる部分である。この点も念頭に置きながら、考察を進めたい。

なお本稿では、皇国としての日本のあり方についても言及しないが、それ自体大きな問題であり、篤胤の思想を正確におさえるためにはいずれ無視できない問題である。今回は問題の重要性をここで指摘するにとどめ、具体的な考察については機会を改めることとする。

二、産霊神の生成と「御依（みよさし）」

まずここでは、産霊神について考える。産霊神は、『古事記』の冒頭に登場する神である。高皇産霊神と神皇産霊神がそれであるが、世界の原初に出現した、天御中主神とこの二神を含めた三神をぞくに「造化三神」⁶⁾と呼ぶ。それは造化すなわち世界の生成にかかわるものとして位置付けられている。

篤胤はなかでも産霊神二神に焦点を当てる。⁷⁾その働きは大きく分けて二つある。一つは「生成」、もう一つは「御依」である。前者はただものを生みだすだけではなく、そのうちにある

秩序の形成と維持をも意味する。また後者は、伊邪那岐命・伊邪那美命の営為とも関連する。

まず「生成」については、その働きはその原初から見いだされるものとされている。

この生れる一つの物は天地泉の三つに分りたる物なり。（中略）この一の物の虚空に生初しも其が分りて天地泉と成りて第十図の如く成り、またこの次々の神等の生坐るも悉くかの二柱の産霊大神の産霊によりて成るなり。（『靈能真柱』上p.97）

ここでは「一の物」から天地泉が形成されること、およびそれに伴って神々が生みだされる営為がすべて高皇産霊神・神皇産霊神の力によると説明されている。その力は「産霊」と言われているが、それはものを生みだし成していく力であると解釈できる。なお引用文中の第十図とは世界が現在のようになっているさま、すなわち創造が完成した状態のことである。この世界の生じはじめから完成に至るまで一貫して産霊神の「生成」の力が働き、その及ばないところは無いということである。

それでは二柱の神は究極の存在なのか。篤胤はこの点については、「古の伝」に明示されていないという理由で確言しない。同様の問題には師の本居宣長も直面しており、『くず花』の附録で産霊神を生みだしたものは何かという問いに対して伝えがないため結局のところは知りたがいにし、究極神としての言及を差し控えている。⁸⁾ 篤胤自身もこの問答を引用しながら、究極神としての位置づけには言及せず、むしろ産霊神をはじめとした天神すら知り得ないことがあることを指摘する。⁹⁾ 産霊神を含め原初に登場した三神が、全知全能でかつ自らがすべての出発点となるような神ではないことがここから推察できるが、重要なのは産霊神があくまで天地泉を造り出したことは明確であるという点である。このことについて篤胤は、自身が『古事記』『日本書紀』『古語拾遺』『祝詞』等を踏まえて編纂した『古史』（『古史成文』）を根拠にして考えている。さらに『靈能真柱』において篤胤は、『日本書紀』十五顕宗天皇三年二月の条及び四月の条に産霊神の天地泉生成の根拠を見だし、「天地を造りまし、御功」（『日本書紀』十五顕宗天皇三年二月）の文言を引用している。¹⁰⁾ つまり人間の知を及ぼせるべき範囲について厳密な態度を保った上で言えることは、産霊神が世界を造ったということなのである。

産霊神の「生成」の力は、単に物としてのそれを造るというだけではなく、その物のありかたとしての秩序もともに規定している。そしてその秩序のありかたは、物が造られる過程と連動している。その秩序とは清穢である。造られる過程における上下は、清穢ないしは善悪と相応する。「一の物」が上昇して成った「天」は「日」すなわち太陽であり、「清明」（『靈能真柱』上p.102）き性質を持つ。その国柄も「勝れてうるはし」（同下p.158）く、「五つ柱の別一天神」、「伊邪那岐命」、「天照大御神」等の「八百万の善き神神」（同）が留まるところとなっている。第八図、第九図を見ると、「天」には禍を直すために生まれた「大直毘神」も存する。つまり「天」は「善

事のかぎりある国」(同)というように、善において徹底した国なのである。なおこの場合の「善」とは道義的な善のみならず、それも含めた広義ののぞましいもの全般を指す。

一方、下の方に成った「泉」(「夜見」)は月である。「天」と比べて「彌々益々重濁れる」「いとも汚穢」(同、上p.103)きもので、「重く濁れる物」が凝集して成っている。この「重き濁れる」穢さは、「悪しきもの」と呼応する。つまり「泉」は、「万の禍事悪事」(同下p.158)が集まり留まるところである。そこには第九図にあるように伊邪那美命や大禍津日神、速須佐之男命も存する。なお、速須佐之男命は「月夜見命」と同一とされている(同p.139)。穢き「泉」は、悪しきものが集約される、徹底した悪しき場所として位置づけられている。

次に「地」は地球でありこの地上の世界、「国土」である。それは「天」と「泉」が分かれて中に残った物によって成り立つため、「天の善きと根の国の悪きとを相兼」(同p.159)ねている。しかし「天に次では清々しき国」(同p.164)であるとして、その「清々しき」性質が強調されている。重要なことは、この国が「清々しき」と言われるゆえんが、清穢ないしは善悪を截然と分けるということに存する点である。篤胤は、「地」を日の神と産霊神の孫である瓊杵命がそれらの命令を受けて治める場所であるとする。その統治は、清穢ないしは善悪を截然と分けることを規範とするものであった。¹¹⁾そしてそれは、後にも触れるが、そこに住まう人間存在における、清や善を志向し穢や悪を忌み嫌うという性質にも反映している。「地」は清穢・善悪の価値基準を理解し、それに即して生きる人間によって、「天」に次ぐものとして成り立っているのである。ここからは、上下の価値観が人間存在の社会や人間存在そのもののありかたをも規定しているということが見いだせる。

なお、この上下の価値観は、「地」における皇国の優秀性を語る際にも見いだされる。現在の「地」には皇国及び外国が存する。生成過程に基づいてみると皇国は「大地の頂上」にあり、「上の方の正中」(同p.156)に位置する「万国の元国」(同、上p.109)である。周辺の外国も産霊神の力により生みだされたものであり、その点では皇国と同様にその存在価値は認められているものの、優劣ないしは尊卑があるとされる。¹²⁾それは上下に加え、真中か周辺かという価値軸も加わって説明されているが、いずれにしても世界の生成過程が各々の国の尊卑・優劣と連動していることは明白である。なおここでの国の尊卑・優劣は、各々の国に住む人間の尊卑・優劣と連動するものとして語られている。

以上、「天」「地」「泉」が生成されていく際の上下のありかたは、それぞれの性質を規定し、秩序づけるものであった。それは、存在そのものの根底に関わる形而上的な力と言ってもよい。

次に、すでに少し言及しかけてはいるが、人間存在そのものに即して「生成」の力について考える。篤胤は人間の「生成」について次のように述べる。

まづ人の生れ出ること父母の賜物なれども、その成出る元因は神の産霊の奇しく妙なる

御靈によりて風と火と水と土四種の物をむすび成賜ひ、それに心魂を幸賦りて生れしめ賜ふことなるを（中略）死ては、水と土とは骸となりて顕に存在るを見れば、神魂は風と火とに供ひて放去ることと見えたり。（同下 pp.165-166）

人間存在は、肉体と魂によって成り立っている。肉体を構成するのは風・火・水・土である。産靈の力はまず、これらの要素を結び合わせて肉体を形作るところに働く。さらに産靈神は、それに魂を与える。肉体の中に魂を結び付けるのも産靈神の働きであろう。つまり産靈神は、肉体を形作る各々の要素を結び付けること、肉体と魂とを結び付けることという二重のむすびの働きを為す。ところで人間は、死後「神魂と亡骸と二つに別」（同p.167）れ、骸は穢いものとされる。穢いということは「夜見の国の物に属く」（同p.168）ということになる。一方魂は「産靈神の賦たま」（同p.166）うものであり、それゆえに「天に帰くべき」（同）のものであると篤胤は考えている。¹³⁾つまり人間は、産靈神により清いものと穢いもの（厳密には穢くなってしまうもの）の両方が結び合わされているのである。それは「天」と「泉」の間にある「地」に生きるものとして、当然のありようであると言えよう。しかし人間は単なる両者の混合ではない。産靈神由来の清さは、清さと穢さを分けるという性質によって体现されると考えられる。

この点については、厳密には伊邪那岐命の営為であるが、人間が持つとされる禍津日神と直日神の魂の観点から推察しよう。前者は伊邪那岐命の穢を悪む御靈によって成り、穢れに対して怒って暴れ、その結果理に沿わぬことをしてしまう神である。しかし悪神ではなく、あくまで穢れを嫌う神なのである。後者は禍津日神の成した禍を直し、よいものに変えていく神である。この二つの神の御靈を「神も人も」持つとする。¹⁴⁾この二柱の神は清穢・善悪への対応の仕方を方向付けている。この根底には、産靈神の意志や力が伊邪那岐命を通して働いていると考えられる。先取りして言えば、伊邪那岐命・伊邪那美命に対して産靈神が下した「御依」（命令）を通して、清や善を志向し穢や悪を忌避するといった人間存在の規定がなされているのである。その規定を通して産靈神は人間存在において働いていると言える。

ところでそもそも魂は、それが産靈神由来のものであることから、端的に生命エネルギー、いのちそのものと考えることができる。もしくはそれは、物がそこにあることの根拠ということもできよう。これもまた先取りとなり、厳密には伊邪那岐命・伊邪那美命の営為に関わるが、先の四つの元素は、伊邪那岐命・伊邪那美命が生みだした風神、火神、水神、土神に相応すると考えられる。「天地の間なる万の物何物かはこの四柱の神の産靈に洩れたる。また何物かはこの四柱の神の産靈の理を以て知られざらむ」（同、上p.114）というように、万物存在はすべて四柱の神により生じている。この引用における「産靈」は、直接的には四柱の神の力である。しかしそうした神の力はそれ自体に由来するのではない。四柱の神が生みだされた経緯を踏まえると、その根拠は産靈神を主とする天つ神による命令にその根拠があると言える。つまりも

とをたどれば産霊神の力によると言える。「二柱の大御神の天神祖命の国造らせと詔はし、大御依を畏まり賜ひて、その御命の如く国堅め生み生じ」(同)とあるように、根底に産霊神の命令が存するのである。この点を踏まえてそもそもの魂の質について考えると、人間の持つ魂とは産霊神に由来する、人間存在を根底から支えるものであると言える。

以上の考察を通じて、「御依」というもう一つの産霊神の働きが浮かび上がってきた。「御依り」ないしは「大詔命」は、厳密には産霊神二柱を含む天つ神の命令である。それは世界生成の要所要所で示される。たとえば伊邪那岐命・伊邪那美命への国生みの命令¹⁵⁾、皇御孫命、及び代々の天皇による国土の統治命令¹⁶⁾、大国主命が幽世を治めるという取り決め¹⁷⁾などである。

始めに伊邪那岐大神と伊邪那美大神と国堅め生成し給ひ、さて分れて天上と夜見とに神留坐し、其御子天照大御神と須佐之男大神ともまた天と泉とに相分れ給ひ、今また各その御子孫相分れて、終にこの顕国の幽冥と顕明とを所治看し別給ふこと、永く定まり、かの青海原潮之八百重を治らせと依給へる神勅の幽にしるし有ること、その元はみな二柱の産霊大神の産霊の御霊に因ることにて、深き所以あることなるべし。妙なるかも、奇しきかも、奇しきかも、妙なるかも。(同下p.146)

というように、神々の営為は産霊神の産霊の働きにより成り、天・地・泉ひいては顕・幽の秩序は整然とまとめられていく。重要なことは、その働きが特に二柱の産霊神の言葉として明示されているという点である。実際は伊邪那岐命が速須佐之男命に対して行った命令であったり、天照大神が下した命令であったりしても、それらは産霊神の言葉を通してその意志が伝えられたということであり、大元に産霊神が存する。その力の伝達が言葉によってなされたということには、神の発する言葉の重視という発想が垣間見え、この発想はひいては尊重すべき真の古の伝えが、正しく美しい言葉として残るということともつながりうる。¹⁸⁾

神の言葉の重視は、篤胤が高皇産霊神と神皇産霊神をと同一視していることを見ると、一層明白である。篤胤は、再三この二柱の神を「神魯企神魯美命」(同, 上p.97)であると説明する。これらを同一視する考え方については様々な立場があるが¹⁹⁾、篤胤の同一視の根拠には祝詞があると考えられる。「神魯企神魯美命とは(中略)高皇産霊神神皇産霊神を天皇命の称し給ふ御称なり。さてその御依し坐る天祝詞之太詔事とまをすは、世の初発よりの故事を神魯企神魯美命の大御口づから伝へ坐して」(同下p.149)と篤胤は言う。ここは、皇孫である天皇が「神祖命の御依し坐るまにまに」(同)、すなわち産霊神の仰せの通りに統治を行うということを説明する箇所である。注目すべきは、産霊神二柱の別称が天皇の立場からの呼び名である点である。むろんこの名称は「神祖命」とも言い換えられているように、天皇と産霊神との関係が祖先と子孫のそれであるということの意味する。もう一つ重要な点は、この名称が神と人とを繋

ぐ言葉である祝詞で散見されることである。たとえば「大殿祭」や「鎮火祭」、大祓等の冒頭には「高天原爾神留坐須，皇親神魯企・神魯美之命以氏」（「大殿祭」『祝詞 寿詞』p.30）²⁰⁾の文言があり，祝福の根源をたどればこの二神となるという解釈がなし得る。祝詞はこの国土の秩序や祝福を神に祈るものである。つまり，神魯企命・神魯美命すなわち産靈神二柱はこの国土を根底で守り，祝福するのである。産靈神における神魯企命・神魯美命という別称は，天皇を通じて実際にこの国土になされる具体的な祝福を明確に浮き上がらせるものであると言える。

祝詞という具体的な言葉を一年のサイクルの中で積み重ね，天皇が遂げるのは「天祝詞之太詔事」の実現である。むろんこの「天祝詞之太詔事」の実体が具体的にはどのようなものであるのかは，『靈能真柱』では明確にされていない。ただ上記の文脈に基づけば，実際の「惟神なる道」（『靈能真柱』下p.149）として統治が実現することそのものがその言葉を体現していると言えよう。それはむろん祝福に満ちたありようであろう。あるいは「古伝」そのものがその言葉であるとも考えられる。とすれば，「古伝」をそれとして尊重し，それに耳を傾けることが産靈神の与える祝福に気づくということにもなる。ともあれ神と神，神と人を通じ合わせる言葉を篤胤が想定していたと考えることは，可能であり有効である。²¹⁾

それが実体ある言葉であることの一つのてがかりは，その言葉の受け手の反応である。つまり，受け継がれる者によって「畏」きものとされたことである。産靈神をはじめとする天神の命令を伊邪那岐神・伊邪那美神は畏きものとして受け取り，実践した。ここに言葉を介した相互性，ないしは双方向性が読み取れる。むろんこの場合の「御依」の内容は明確であるが，これを手がかりとすれば，創られようとする世界，ならびに創られた世界の祝福がその言葉の目的であり，その言葉を受け継ぐ者たちはすなおにその祝福に参加するということが言える。その言葉を受け継ぐことは力を受け継ぐことでもある。次章では，産靈神の言葉と力を受け継ぐ者としての伊邪那岐命・伊邪那美命の営為について考察する。

三、「御依」を受けるもの—伊邪那岐命・伊邪那美命の営為—

伊邪那岐命・伊邪那美命への産靈神等の「御依」は，『靈能真柱』上第五図冒頭の古伝にある。「其天神諸之命以而詔命伊邪那岐命伊邪那美命二柱神可修理固成此漂在之国而賜天之瓊矛而事依矣」（同，上p.104）とあるように，伊邪那岐命・伊邪那美命は「地」にあたる箇所を造り固める命を受けている。その際注目すべきは天之瓊矛である。これは玉の飾りがついた矛であるが，篤胤はその玉をただの飾りではないとする。もっと言えばそれは，産靈神の力を分与することを示すものであった。

その玉を飾れることは妙なる由あり。其は五柱の天神ことには産靈神の産靈の御霊を二柱

の神に幸ひ依し賜ひ、国土を功し成させ賜はむとて其の御璽の祝の飾に飾りたまへる物なり。(同p.105)

この箇所の「幸」は、産霊神の産霊の力すなわち「生成」の力を二柱の神に与え、周到に国づくりが出来るように守り支え、力づけることを意味する。産霊の力がまさに伊邪那岐命・伊邪那美命に委ねられたのである。玉によって産霊すなわち生成の力が付与されること、いわば功の受け継ぎが可能になることについて篤胤は注目し、同様のことは伊邪那岐命から天照大神に譲られた玉、須佐之男命の所から大国主命が持ってきた琴にもあてはまるとする。²²⁾ いずれもこの世界の秩序が整えられていくための要所と言える場面である。玉によって象徴される産霊の力が全てにわたるさまが示されている。

玉が象徴する力は「(伊邪那岐命の) 御魂の幸」(同p.126) とも言われるところからも明白なように、「生成」にほかならない。これについて篤胤は、伊邪那岐命と天照大神の場面に即して説明を加える。伊邪那岐命は国土及び国土を「幸ひ坐すべき神々」(同p.126) を生んだ後に禊によって天照大神を生み、みずからの行いが大いなる功を遂げたことを喜ぶ。そして「是より以後は世に靈幸ひたまふべき御功德を悉に大御神に禪賜ふ御璽にその御頸珠をば給へるなるべし」(同) というように、「生成」の力を体現する玉を天照大神に譲る。「生成」の力とは世界をただ生成するのではなく「世に靈幸ひ」とあるように、生みだしたものに大いに恵みを与え榮えさせる力である。

注目すべきことは、その玉が「生成」の営為を行う天照大神自身の生命をも守り、長らえさせる祈りの象徴でもあることである。玉を授与する際に伊邪那岐命は玉を揺らす、篤胤はこの所作に以下のような呪術的な意味を見いだす。「その玉緒瑠に取振かして給へるは、大御神の御壽を長く天足し賜へと祝坐ての御わざなり」(同) というように、玉を揺らすことは天照大神の命の生命力を旺盛にし、長く保つ作用を持つとされる。²³⁾ 天照大神は伊邪那岐命の「御依」のままに「高天原の君」となり、また「日」即ち太陽としての働きを為すのだが、これは太陽として国土のあらゆる生命を育むという意味を持つと同時に、国土を平和に統治する皇孫を生みだしその統治を守り支えるという意味をも併せ持つ。これがまさしく、天照大神に託された「生成」の営為の内実である。そしてその営為は、いずれも永く続くことが祈念されるものであった。玉は揺らされることによってそれを身に付ける者の力を増幅させる。天照大神による永遠に持続する「生成」の営為を、伊邪那岐命は祈念したのである。その祈念をも含み込むものとして玉が授与されることを考えれば、玉自身に「生成」の「幸」(恵みの力) とそれを旺盛に増幅させる力があると考えられることもできよう。

その祈念はしかし、伊邪那岐命個人のものではなかった。伊邪那岐命と伊邪那美命に国土の修理固成を命じた産霊神ら天つ神の祈念でもあった。その祈念は国土が守られ、彌榮えていく

ことであった。伊邪那岐命は玉を通して産靈神の祈念とその力を受け継ぎ、それを天照大神へと伝えたのである。限りない生成に満ちた豊かな国土、そこに生きる人々の美しく正しきありよう、それが産靈神の祈念し、形作り、守ろうとした世界であった。むろんその国土は天と泉との全体的なバランスのもとにある。国土を巡る世界全体のありようが恵まれてあること、その祈念を神々が共有する。その図式がここに読み取れる。

祈念の共有はさらに、伊邪那岐命と伊邪那美命が産靈神の「御依」をどのように受け止め実践していったかを見ると、一層明白である。先取りして指摘してきたように、二柱の神の「御依」に対する姿勢は「その大詔命を畏み賜ひて」（同p.118）とあるように「畏」むことであった。それは忠実にその「御依」を実現することであり、伊邪那岐命・伊邪那美命の全ての営為は「国土を固成」（同）することに関わるものであった。²⁴⁾

このことについて、非常にわかりやすい箇所がある。

国生賜ひて後に風の神を生坐し、も、国土の狭霧を掃賜はむとおぼしての御事なり。また伊邪那美神の火の神を生坐し、も此は国土になくはえあらぬ物ゆゑ生みませるなるべく、またその火の神の荒びを鎮めますべき土の神水の神を生賜へるも、国土を大切おぼはしてのことなること（中略）其はすべて、其の御祖と坐す産靈神の大詔命を畏み重みし賜ふ故なりかし。（中略）故その生れ坐し御子神等彼の謂れによりてこの神の生れ坐し、此の謂れに因りてかの神の生れ坐せると、その生れ坐せる御謂こそ異なれども、みな二柱の神の国土をいそしみ思ほす大御心より生出たまへるなれば、その神々の今の現に国土に幸ひ賜ふ御功の跡をつらつらに察もてゆけば、またこの御謂れに少も違ふことなし。（同p.118）

これらの神々は先に見たように、人間存在の肉体と魂を形成する点でも必要不可欠である。いわば生命のもとであるといってもよい。基本的にはいずれの神も国土に生きる者の生を支える働きを為すもの、すなわち「幸」を与える働きを持つものと考えられる。そこから伊邪那岐命・伊邪那美命二神の「国土を大切」（p.118）に思う気持ちも読み取れる。風・火・土・水の神々は二神の国土を大事に思う情から生まれたのである。そしてその愛は、産靈神の抱いたそれにほかならない。産靈神の愛を引き継ぐのは、「産靈神の大詔命を畏み重みし賜ふ故」（同）であった。この愛は創成のただ中のみならず、現在に至るまでこの国土で具現している。今を生きる我々もその神々の恩恵を受け続けているのである。

このことすなわち今現在にも及んでいる神々の働きについて、篤胤は次のように描写する。

近く稲種を土に植るを天つ日の蒸生し登らすことはかの火の神の埴山毘売神に御合て稚産

靈神の生坐ると全く同じ理りにて、火の神土の神水の神の御靈に因るなり。さて火の土に照入ることの烈ければ悪虫も多く生り出て稲も枯れなむとするを、その烈く照入る火気に蒸されて、山に含める水の天の狭霧と立昇りて雨と降るは、これ山の神土の神水の神の幸ひ賜ふところなり。(中略)如此火の氣と水の氣と互に争ふはしに雷神のおどろおどろと鳴り出て靈神の氷雨をさへに降らし給ひ(中略)人すらにおびえ魂ぎるばかりに畏めば、まして虫などは深く穴に隠れ、死もすめり。さて天霧ひ雨の過れば風の吹き出て吹撥ひ、風の過れば雨の降り来て風を和め、如此神々の御所為の互に相助け相制て國土を幸ひ賜ふ。其の元の理りをおし窮むれば天つ神の此の國土を作固成せと依給へる大詔命を二柱の神の重しみたまふ大御心に生成給へる神々に坐すが故なり。(同pp.118-119)

ここにみられるように國土におけるあらゆる自然現象は、風・火・土・水の神々が各々の働きを為し、その調和によって成り立っている。その調和の中で稲や虫、人間の生が育まれる。神々の働きはまさしく「國土を幸」うものであった。そしてそれは永遠に持続するひとつの秩序なのである。直接具体的な働きを為すのは生まれた四柱の神々ではあるが、その働きは伊邪那岐命・伊邪那美命を通して産靈神に由来する産靈の働きによると言えよう。四柱の神々により世界が美しく整えられ、それが持続する。すべての存在は、その存在の始めから終わりまで産靈の働きの恩恵のただなかにあるのである。そのことがまさしく神々の「幸」の内実である。また神々の存在そのものとその働きが、産靈神の「御依」を尊重する心由来であることから、それは産靈神の「心」の具現化であり、その心こそが継続的な「國土の幸」にほかならないのである。

伊邪那岐命・伊邪那美命が産靈の働きを具現せしめ、世界をいや栄えさせることは、伊邪那美命と火の神をめぐるエピソードからも一層明白である。國土は前に見たように、「天」と「泉」の間にあり、清と穢が混じる場所であった。しかし清を志向することのできる場所でもあり、清を目指せるということそのものが実は、産靈神とそれに続く二柱の神、及び四柱の神々によって志向されたことであった。伊邪那美命は火の神を生むが、その後土と水の神を生む。その意図がここでは非常に重要である。伊邪那美命は火の神を生んだ後、その生む様を伊邪那岐命に見られたことを恥じて泉の國に往こうとする。しかし、

この上津國に火の神を生置給ひつれば、その禍事あらむことを御心苦く思ほして、途なる黄泉平坂より立還坐て彼の神の荒びを鎮め坐す料に、土の神と水の神とを生坐せるなり。(水と土の火を制ぐは全この御謂れに因ることなり)その大御心を量り奉るに、此は天つ神の御事依によりて生坐る國を重みし給ひてのことになむ有りける。(同p.118)

というように、伊邪那美命は火の神を生んだ責任を、その災いを防ぐ力のある土の神と水の神を生むことで負おうとする。その姿勢は、端的には国への愛による。その愛は産霊神をはじめとする天つ神のご命令に基づく。再三指摘しているが「御事依」を十全に取り次ぐことは、そこに込められた国土への愛を引き継ぐことにはかならない。国土を愛するということは、それが十全な形で恵まれることを望むということでもある。伊邪那美命としては、出産のおどろおどろしい様を見られた恥を何とかしたいという思いがあった。しかしそれは言わば伊邪那美命の私的な思いであった。それを超えて「御事依」を重視するという、いわば公的な思いがここでは勝ったのであり、この点が重要なのである。それはまさしく「御事依」を「畏」む態度である。そしてそれが遂げられるには、火の神に対処する必要があった。そのまま泉国へと隠れてしまってもよかったにもかかわらず、災いをもたらすであろう火の神対策としてさらに二神を生んだ。その伊邪那美命の行為は国土に対する愛の証に他ならない。むしろ、それはさらにそれを命令した神への畏敬に裏付けられたものである。畏むがゆえにその行為を全うする。その行為の具体的内容がまさに「幸（さちはひ）」うことであった。

ところで件の火の神は、両義性のある神である。「そもそも火は万の物を害ひ亡して甚く世の災事をなす畏き物なるを、また有りと有る万の物を幸ひ生ず止事なき物」（同p.119）であると篤胤は言う。火は基本的には万物を生じさせるという善い働きを持つ。しかしそれがたとえば泉国の穢れに犯されるなど、何かの拍子で穢れてしまうとその為すことは災いとなる。生命を育むどころかそれを奪い取ることになりかねないのである。それゆえに火は忌まねばならないのだが²⁵⁾、重要なことは火が国土にとって無くてはならぬものであることである。そして、その両義性故に生じる災いを回避するための土の神と水の神の二柱とともに存在することにより、そのものを生かす働きは確実に所を得ることになる。伊邪那美命の愛とは、火の神のみならず土の神と水の神を合わせて生んだことにより体现されているのである。これは先に見た、四柱の神々の各々の働きによる調和という考えと通じ合う。火は忌むべき部分を持ち、時には災いをもたらす。しかしその災いを放置するのではなく、それに対応するものも同時に生んでおく。伊邪那美命としても、災いの放置による生けるものの苦しみを見過ごすことはつらく苦しいことだった。国土が苦しむこと、それを伊邪那美命は危惧し、また心を痛める。心を痛めるのは国土に対する愛ゆえである。この国土への気遣いが一貫して受け継がれ、体现されているのである。

以上、世界創成にかかわる「御依」を「畏」んだ伊邪那岐命・伊邪那美命は、産霊神の「心」と力を継ぎ、国土を愛し大事にして整えることを願い、それを体现した。その体现において二神及び二神が生みだした四柱の神々は、世界とそこに存するものたちの存在を尊び、支え続けるのである。清と穢ないしは善悪が混じるこの国土は、その支えと守りにより、たとえ穢や悪があってもそれに墮することなく回復し、清や善となる。この一貫した秩序が保たれているこ

と、それが神の「幸」であり、そのただなかに生きる我々はそれをまさに「畏」み、その意識の元、日々を生きるべきなのである。ここに、「畏」という宗教的要素と日々を清と善を目指して生きる倫理的要素が交錯する。この二つが交錯する世界が、まさしく神々の手によって成し遂げられているのである。

四、まとめと今後の課題

以上、『靈能真柱』における神の「幸」について考察を試みた。「幸」とは、産霊神の産霊の力を根源として、伊邪那岐命・伊邪那美命等の営為にもわたる、人間存在をはじめとした世界の存在を生かし、力付け、祝福する力であった。この世界、すなわち「天」「地」「泉」及び「幽世」に到るまで、神々の力が及ばないところはない。この世界はまるごと神々の手にあり、愛され、整えられている。特にそのことは、伊邪那岐命・伊邪那美命が産霊神の「御依」を尊重しそれを実行する点に表れていた。加えてこの二柱の営為は、実際のこの地での直接的な「生」と直結する故に、切実な形で尊崇と畏敬の念を持って受容しうるものであった。ここでは、産霊神と伊邪那岐命・伊邪那美命とを結ぶ尊崇・畏敬と、人間のそれらの神々への尊崇・畏敬とが二重写しになっていると言える。整然とした世界が存し、そのなかに自分という存在が位置付けられているといった自覚を、一つには生成の過程の最初から図式化されたマクロな視点から、一つには自らの心身を通して自らの生き方と向き直るというミクロの視点から行うことが、『靈能真柱』では目指されていたのである。その生き方の論拠が「天神祖命の大詔命もて伝へまし、神随なる大き道」（同下p.183）であり、篤胤自身もそれを「規矩」（同）として生きることを表明し、読み手にも指し示すのである。その「大き道」に対する尊崇、それが宗教的にも倫理的にも人々を方向付けるものとして示されていると言えよう。

むしろ本稿では合わせて見るべきである『古史伝』などに触れず、かなりおおまかな論じ方をしたために、さらなる精査を必要とする論点がいくつか存する。最後に今後の課題としてそれらを指摘したい。

まずは、産霊神二柱の位置づけについてである。『靈能真柱』冒頭では高皇産霊神が男神、神皇産霊神が女神とされ、さらにそれぞれの職掌が「顕事」と「幽事」とされていた（同、上p.97）。前者については、各々が男女に比されていることから、産霊神の「生成」の様相や質を検討する手がかりとなり得る。また後者については、産霊神の力が「顕世」と「幽世」の双方に及ぶこと、換言すれば世界をそのように二元的に創ったことの意味を考える手がかりとなり得る。ひいてはこのことは、産霊神一柱ずつの性格付けの考察にも繋がりをうる。

次に、大国主神が主宰する「幽世」への言明についてである。あまり触れられなかったが、顕幽にわたる人間存在の生のありかたを考察するには、大国主神の位置づけやその営為を精密におさえる必要がある。「幽世」の存在及びその強調は、やるせなく生きづらい「顕世」を生

きる人間存在にとって救いに他ならない。「幽世」を含めた人間存在の豊かな生を根拠付けるのも産霊神であるという認識は、自らの生を一層力づけるものとなる。それは、宗教もしくは何かを信仰するという意味につながるのではなかろうか。またその世界観は、「顕世」をいかに生きるかといった倫理的課題とも緊密に結びついている。「幽世」をめぐるさらなる精査は、人間存在を倫理的かつ宗教的な観点からおさえる上で、必要不可欠であると言える。

最後に、先にも少し触れたが、日本の皇国としての優秀性の位置づけについてである。尊卑優劣はあるものの、諸外国もこの「国土」にあり産霊の力を根拠として成り立つものであった。その点で諸外国の存在そのものも、価値が認められていると言える。ただそれが伊邪那岐命・伊邪那美命を継ぐものではないという点も含め、尊卑優劣の区別を強調してしまうことによる世界認識が孕む問題について、今一度考える必要がある。その区別も確かに産霊神が規定したものであるが、それは普遍性を担保するとは言い難い。むろん篤胤や、篤胤を受容する人々が身を置く社会的ないしは思想的背景なども考慮に入れる必要があるが、今後精査したい。

以上、今後の課題がいくつかあるが、これらの点も踏まえて継続して篤胤の思想を探っていきたい。

注

- 1) 「この築立る柱はも。古学する徒の大倭心の鎮なり」(p.92)と『靈能真柱』冒頭にある。そもそもこの書の名前が「魂の柱」であり、その内容が古学の徒の存在そのものの基盤ともなるようにとの意味がこめられている。以下『靈能真柱』からの引用は『新修平田篤胤全集』第七巻 平田篤胤全集刊行会編 名著出版 2001による。ページ数は全集の総ページ数に基づいて表記した。なお引用に際しては、読みやすさを優先し、適宜表記を改めたところもある。
- 2) 本居宣長は『古事記』の記載に基づき、『古事記伝』や『鈴屋答問録』等において人の死後について、どのような人の魂も暗く穢い夜見國に行くほかないといった、持論を展開した。それは現世に中心点を置いた議論であると言えるが、死後については希望を示さないものであった。
それに対し篤胤は、自ら編んだ古史に基づき死後も永遠に存する魂のありようについて語る。生前死後を貫く魂として人間存在のありようを語り直すことで、師の論では語られなかった人間存在の意義そのものを明らかにしようとした。そのため篤胤は、死後人間の魂は夜見には行かないということを力説する。それを語るためには壮大な世界とその背後に働く神々の力の体系を示す必要があったのである。つまり、どのように人間や人間の存する世界が出来てきたのかから語る必要があったのである。篤胤は「魂の行方」と表現してはいるが、上記の理由からこの語には人間存在のはじめからおわりまで(魂は永遠に存するので「おわり」というと語弊があるが、究極的に逗留するところという意味で述べる)が含まれていると考えたい。なお『靈能真柱』執筆意図やその意義については子安宣邦校注『靈の真柱』岩波文庫 1998 解説に詳しい。氏は「神話における天地や神々についての言及がもはや単に古文献の研究的な言説ではなく、人々の宗教的な要求や社会的実践の要請に応える教説の性格をもつ」(同 p.218)と述べる。本稿もこの理解に沿いつつ、特に「宗教的な要求」という点に力点を置く立場で考察している。
- 3) 『靈能真柱』における「幸(さちはひ、さきはひ)」の初出は前掲の p.93 の引用箇所である。天地泉を天地泉たらしめ、それらのありようを祝福し恵むということである。なおこの語について、『旺文社古語辞典新版』(旺文社 1982 重版)では「さちはふ」は「さきはふ」であるとし(p.529)、「榮える。幸運にあう。(自動詞四段活用)」,「榮えさせる。幸運を与える(他動詞下二段活用)」(p.516)とする。『岩波古語辞典』(岩波書店補訂版 1990)では「さきはひ」(自動詞四段活用)は「生命力の活動が活潑に行われる」こと,「さきはへ」(他動詞下二段活用)び「生長力の活動を盛んならしめ、それによって幸いあらしめる」(以上 p.561) ことである。
- 4) 本文中でも言及するが、神々の営為が「靈く奇く妙なる」(『靈能真柱』上 p.9)のものであり、畏敬の念をもって受け取られるべきものとしてたびたび言い表されていることを宗教心もしくは信仰心として解釈している。
- 5) 『古史伝』二三『新修 平田篤胤全集』第3巻古史伝 平田篤胤全集刊行会編 名著出版 2001 pp.170-178を参照のこと。
- 6) 『古事記』の冒頭の三神を指す。『日本書紀』の冒頭の記述と異なる。『神道事典』(弘文堂 1999)の造化三神の項目によれば「同書の序に『乾坤初めて分るとき、參神造化のはじめとなり』とあるので、こう称される」(同 p.41)とある。また同書では「近世の国学者の間で『日本書紀』より『古事記』を重視する傾向が強まり、さらに幕末維新期にキリスト教の天地創造説が意識された結果、造化三神を最初に生成した神々として強調する神学的見解が多くなった」(同)とされる。つまり産霊神重視は近世における国学の一つの傾向であり、篤胤の思想もその流れにあると言える。以上『神道事典』からの引用は、國學院大學日本文化研究所編『神道事典』弘文堂 1999 井上順孝執筆の項目 p.41 によった。
- 7) 『靈能真柱』では「造化三神」のうち天御中主神に関する言及は少ないが、その主宰神としての性格については、『靈能真柱』以後執筆された『本教外編』で言及されている。そこでは天御中主神は「天地万物を生ずべき徳」を持ち、産霊神二神はその「神徳を持ち別けて、「天地万物を生じ」また「主宰」するとされている。(以上『本教外編』石田一良校訂・訳・注『神道思想集』(筑摩書房 1970 所収の p.302) 篤胤においては究極的には天御中主神が根源神として位置付けられていると言える。しかし、『靈

能真柱』では産靈神の方が重視され言及されているため、その思想の変化については詳細を精査する必要がある。キリスト教の影響についてはつとに指摘されているが、その点を措くとしても主宰的な存在を設定する篤胤の神観念は、日本における神の捉え方の流れの中で注目に値する。

- 8) 本居宣長『くず花』附録大久保正編『本居宣長全集』第八卷筑摩書房 1972 所収 p.177 参照。むろんここではテキストとすべきものに書いていないことを類推する姿勢を避けること、及び人知の及ばない理が働いていることの認識があり、この姿勢を篤胤も踏襲している。
- 9) 「またその天つ神すら大御心と定かね給へることは、太占してト問ひ給ひつ。」(『靈能真柱』上 p.98) なおこの「天神」は第一図にある天御中主神、高皇産靈神、神皇産靈神に加え、第三図で生じた宇麻志葦牙比古遲神と天之底立神を加えた五神を指す。
- 10) 同 p.98。なお『日本書紀』卷第十五顕宗天皇三年の春二月及び夏四月の条参照。(坂本太郎他校注『日本書紀上』岩波書店 1967pp.523-524 参照。
- 11) 「(地は) 天に次では清々しき国なる故に日の神産靈神の大御孫に坐ます天日高彦穗瓊々杵命の、その日の神産靈神のいとも畏こき御依に因りて天降り坐し所知看初め給ひ、清きと穢きときはやかならではえあるまじき謂れなるに(後略)」(『靈能真柱』下巻 p.164)
- 12) 篤胤は皇国と周辺の外外国との優劣について、『靈能真柱』上巻の第六図(pp.106-111)で詳述する。その際篤胤は、服部中庸の『三大考』を引用して「産靈神によりて成れることはひとしけれども外国は二柱の産給へる国に非ず。これ皇国と初めより尊卑美悪き差別の分るるところなり」(『三大考』)という皇国と諸外国の関係を提示している。(同 p.108) なお『三大考』pp.395-396 参照。服部中庸『三大考』は本居宣長著倉野憲司校訂『古事記伝(四)』岩波文庫 1994 所収による。
- 13) 『靈能真柱』下 pp.166-167 で篤胤は様々な例を挙げて「魂」が「天」にゆくという推察を裏付けようとしている。なおこのくだりの趣旨は、死者の魂が穢い国である「泉」に行かないことをその魂の「清」の由来に即して述べることにある。
- 14) 『靈能真柱』上 pp.124-125。
- 15) 「其天神諸之命以而詔命伊邪那岐命伊邪那美命二柱神可修理固成此漂在之国」(同 p.104)
- 16) 「皇御孫命の御々代々その神祖命の御依し坐るまにまに己命の御さかしらを交給はず政賜ふを惟神なる道とはいふなり。」(同下 p.149)
- 17) 「遠つ神代に天神祖命の御定まし、大詔命のまにまにその八十隈手に隠坐ます大国主神の治する冥府に帰命まつればなり。」(同 p.170)
- 18) 篤胤は高皇産靈神と神皇産靈神の言葉について「我が皇大御国の古の伝への正実にして真の道の伝はり、また古語の麗く世の人の声音も言語も雅にして万の国に比類なきことよ」(『靈能真柱』下 p.149) と言う。その言葉は内容の正しさのみならず、雅さも持ち合わせるものである。言葉の正しさ美しさは神のもののみならず、そこに住む人々の言葉もそのように性格づける。続く箇所ではさらに、皇国と外国との言葉の尊卑が語られていく。
- 19) 西宮一民氏は祈年祭をはじめとした様々な祝詞がカムロキ・カムロミ(※西宮氏の表記に従った)の名で称えられていること、その祝詞のなかに忌部氏が伝える大殿祭のものがあることに基づき、産靈神二神とカムロギ・カムロミとの同一視は斎部広成撰の『古語拾遺』が最初ではないかと考えている。以上、西宮一民氏の『古語拾遺』訓読文補註 pp.58-59 (西宮一民校注『古語拾遺』岩波文庫 1985) 参照。このことを踏まえると、篤胤の祝詞重視は、『古史成文』を編む上で『古語拾遺』をも重視していたこととも関連すると言える。またカムロギ・カムロミが何を指すかをめぐっては、『神道事典』(弘文堂 1999)によれば、賀茂真淵は高御産巢日神・神皇産巢日神(※篤胤の表記と異なるが同一神)をはじめとする「すべての皇祖神を指す」とし、本居宣長は「高御産巢日神と天照大神」であるとする。そして、今日の見解として「この語自体が特定の神を指すものではなく、記載された文献により指示する神々は異なると考えられている」としている。以上、國學院大學日本文化研究所編『神道事典』弘文堂 1999 遠藤潤執筆「神漏岐命・神漏美命」の項目 p.39 より引用、及び参照。

- 20) 千田憲編『祝詞・寿詞』岩波文庫 1935。「鎮火祭」(p.39), 「六月晦大祓」(p.34) 等も参照のこと。
- 21) 子安宣邦氏は「天祝詞の太祝詞事」とは「神聖な祝詞をいう美称」(子安宣邦校注『靈の真柱』岩波文庫 1998p.99) であるが、「篤胤は神魯企・神魯美命(天神祖命)の詔事として実体化する」(同)と、第九図の本文の注 11 で説明する。実体化することによって篤胤が示そうとしたことを探ることは、篤胤の思想の核心に迫ることである。
- 22) 「伊邪那岐命の、大御神に御頸珠を賜へることは、その御魂の幸を悉に禪りたまはむとの御所為なることをさとるべく、又天つ神の二柱の神に瓊矛を給へるも、また大国主神の須佐之男大神の天之沼琴を取て逃還まし、も、悉にこの謂によることなり。」(『靈能真柱』上 pp.126-127)
- 23) 篤胤は「大殿祭」の詞や「出雲国造の神賀詞、『万葉集』の大伴家持の和歌などを引証し、玉を揺らすことの意味を生命力の増幅ないしは長寿を願うこととしている。(同 p.126) なお篤胤はここで、「みたまのふゆ」という「神の幸ひの漸に加ゆく」(同 p.127) 言葉にも言及している。篤胤は玉を揺らすという所作について、神々の力を賦活する神事の場面も念頭に置いていたのであろう。
- 24) 「伊邪那岐命、妹神の御後を追て泉の国に往坐る時の御言に吾與汝所作之國未作竟則可還坐と宣ひ、また伊邪那美命、妹神を泉つ平坂まで追及たまひてその御離の節の御言に、吾與汝已然生國矣、奈何更求生乎と宣へるなどにて、その始終の御所為どもの悉く國土を専といそしみ給ひての御事なること灼然し。」(同 p.118)
- 25) 火の忌みについては『靈能真柱』上 pp.119-120 にも言及されている。また火については『古史伝』五の巻、六の巻も参照のこと。なお古伝の正確な伝えを重視する篤胤は祝詞の内容を重んじる。特に火については「鎮火祭」の祝詞の内容を踏まえて解釈している。